

武田泰淳研究

——全集未収録作品「樹液」について——

A Study of TAKEDA Taiyun

長田真紀

Osada Maki

要旨

『増補 武田泰淳全集』に未収録の「樹液」について紹介し、作品の背景についても論じた。

キーワード：「武田泰淳」、「樹液」、「戦後派作家」、「仏教」

このたび、戦中戦後を通して刊行されていた文学系雑誌をいくつか閲していったところ、短歌総合雑誌の「日本短歌」^{〔1〕}昭和二十五年新年号（昭和二十四年十二月二十七日印刷 昭和二十五年一月一日発行 第十九卷第一号）に、武田泰淳が「樹液」という随筆（随想

的色彩の濃い短編小説といつてもいいかもしれない）を発表していたことを確認した。

これは、『増補 武田泰淳全集』に未収録であり、武田年譜の定本ともいべき古林尚氏作製の「武田泰淳年譜」〔増補 武田泰淳全集〕の別巻『増補 武田泰淳研究』（昭和五十五年三月 筑摩書房）に収録）にもその存在についての記載はない。

本稿ではこの「樹液」について紹介かたがた幾らかの解題を付し、武田文学誌の空白を埋めたい。

まずは全文を掲げる。なお、仮名遣い、旧漢字の表記等は原文のままとした。句読点の不備についてもあくまで原文にしたがい、敢えてそのままとした。

樹液

武田泰淳

川ぞひにはいつのまにか新しく家が立ち並んでゐた。そのため自由に川べりに出られなかつた。まだ空地の場所には、コオルタル入りのドラム罐が積みかさねられてゐた。その傍をすり抜けて、焼けのこつた石の土臺の上に立ち、河をのぞき込む。石垣の直下には黒い泥が露出し、ぬめ／＼光る青黒い午前の水はそこだけ残して、ゆたかに流れてゐた。その泥の上に鼠が一匹動いてゐた。茶褐色の毛も長く、おどろくほど大きな鼠だつた。泥の上には瓦や石材やトタンがなかば泥に没し、なかば水に洗はれてゐて、その起伏の上を、鼠は跳び歩き、そして隠れ場らしいトタンの下に出入した。

はじめはその一匹だけが、ほとんど無意味なほどまぐるしく、往つたり來たりした。やがて他の一匹がトタンの隠れ場所から出てくると、最初の一匹はよろこばしげに跳躍した。後の方はやや小さ目であつた。二匹とも赤褐色の毛がいかにも清潔で、美しくさへ見えた。青黒い河泥の上に、六月の陽がさしかけてゐる、水の中にゆれうごいてゐる澤庵漬けの大根の黄色な^マどが明確な色どりをしている。そんな展かれた明るい場所であるだけに不潔な感じがしなかつた。

大きな方は小さな方を追ひかけまはした。そして急にその首にかみつく^マヂツとその背にのしかかつた。小さな方も動かかなかつた。重なつて動かなくなるまでにその二匹は自分たちの房々

とした毛を、すつかり泥だらけにしてゐた。そして普通のドブネズミらしくなつてゐた。三十秒ほどして鼠たちははなれた。小さな方が逃げたかたちだつたが、大きな方は、何かしでかしてしまつたあとのドギマギした態度で、そそくさと、石垣の間の穴に入つた。小さな方も、自分は自分で、すぐトタンの隠れ場所へもどつた。

それを見終つてから、私はのろ／＼とバラックの方へもどつた。

そこは兩國の國技館の裏手にあつてゐた。そしてそのみじめなバラックには、私の叔母にあたる老婆と、その孫の幼女二人しか住んでゐなかつた。叔母の息子夫婦は戦争中に死亡してゐた。親のない幼女たちはまだ學校から歸つてゐなかつた。あたりにはバラックが散在してゐたが、いづれも小さくて、そのため白々と乾いたアスファルト路だけが廣々として、ガランとした四圍はひどく静かであつた。

息子夫婦が生きてゐたころ、老婆の家はその邊では大きな方であつたし、家内にもぎやかだつた。その家の焼跡には、それ故、庭の部分だけ、さまざまの樹木が少しづつ生え出してゐた。その池の跡に私はしやがみ込んだ。老婆が晝食の用意をしてゐる間、私は待つてゐなければならなかつた。この家に金がないのはわかつてゐても、老婆が負けぬ氣なため、すぐかへるわけにはいかなかつた。老婆は私とその費用にと百圓札二枚わたすと、「一枚でいいよ」とことわつたが、思ひかへして受けとつた。その二枚はその朝私が或る女から借りて來たもの全部であつた。

つた。

その女のことで私は疲れ切つてゐた。「このまま、だん／＼衰へて行く、何とかしなくては」と私は考へてゐた。いろいろと努力しなくてはと思ふことは、それだけ辛くなることであり、そのやうにして人間臭くない場所にしやがみ込んで初夏の草木の色や、焼跡の瓦礫をながめてゐることは、その時の私に楽しかつた。

池には水がなかつた。そしてコンクリートのへりや底はひび割れてゐた。それでも二枚、橋のやうにわたした切石も残つてゐたし、曲りくねつた池の形や、それをとりまく土の起伏ももとのままであつた。底のない焼けたや、かんが一つ、口を下にして池の中央に在つた。そのエナメルの紫色はあざやかに輝いてゐた。

藤の蔓が私の鼻さきスレスレにのびて來てゐた。その軟い若々しい、うす緑色の蔓をひつばつて見た。そして指先に力をこめて、ひねるやうにしてちぎり取つた。すると軽くはずんでもとの位置にかへつた藤の蔓の切れ口に、少しづつ露か汁か、澄んだ樹液がにじみ出してゐた。細い蔓の、ごく小さな切れ口であるが、たまつた液が丸く半球の形になるのがハッキリ見えた。それはやがて、したたり落ちた。そして又たまつた。

私の手にした短い蔓の切れ口にも、同じやうに樹液がにじみ出してゐた。

私がちぎりとつた際、くねつた藤の蔓先がもとへもどつた時、その切れ口は下を向いてゐた。樹液はそのために早くたまるの

かと思ひ、もう一度私は、ちがふ部分で蔓をちぎつてみた。今度はほとんど垂直に立つてゐる形で蔓はもとへもどつたが、やはり前と同じ速度で、液は天へ向いた新しい切れ口にたまり、そしてしたたり落ちた。

すさまじく噴出するのではなく、只しづかににじみ出てくるだけなのが、かえつて、その藤蔓の生命のたしかさを想はせた。ただ單に生え出して、若い緑の葉を茂らせる勢ひといふよりは、その時そのやうにして無言で營まれてゐる植物の祕密の生理、それが疲れ切つて、乾燥した私の精神に水々しい感覺をあたへた。

鼠たちの動作を眺めてゐた時にも、一種の生の面白さのやうなものが感ぜられ、嬉しかつたのだが、樹液の場合にはもつとしみ透つてくるものがあつた。

私は老婆と幼女たちと食事をすませた。幼女たちはこの前會つた頃より、すなほに、人なつこくなつてゐたし老婆の態度にも、わざとらしさが少なかつた。この人たちの生は淋しく、苦しいものにちがひなかつた。だが私は、この老婆と幼女たちを愛し切れる自信はなかつた。はなればすぐ忘れろと思つた。そして、又重苦しい氣分で、女のもとへもどるため、兩國驛へ向つた。私にはその女を全身的に愛し切れる自信もやはりなかつた。そして私は、老婆の一家や、その女のことよりは、澄明な樹液のことの方が何故か自分の頭腦に鮮明に映つてゐる。それを漠然と感じながら、電車に乗つた。

内容を理解するためにも、ここで泰淳周辺の人間関係や作品の背景について述べておきたい。⁽²⁾

文中の「私の叔母にあたる老婆」とは、泰淳の母・つる（戸籍名は「もぎ」）の妹、かめ（明治二十一年～昭和三十三年一月七日）のことである。また、その叔母が住む焼跡のバラックとは、現・墨田区千歳にある浄土宗寺院の西光寺のことである。

西光寺といえ、仏教界においては、渡邊海旭（明治五年一月十五日～昭和八年一月二十六日）が第十六世住職にあつたことで知られる名刹である。海旭は、つるとかめの兄であり、泰淳にとっては伯父にあたる。萩原雲来とともにドイツ留学を果たし、比較宗教学の研鑽を積んだ。宗教大学（大正大学の前身）や東洋大学の教授を歴任し、高橋順次郎とともに『大正新脩大藏経』の監修をしたことでも有名で、浄土宗きつての碩学であつた。仏教徒社会事業の先駆者として、その業績の今日的意義は大きい。加えて、一生妻帯せず不犯を通じたことともに、名僧の誉れ高い。泰淳にとっては、精神的規範であり、非常に大きな影響を与えた人物である。

海旭歿後は、かめの息子である赤尾光雄（泰淳にとっては従兄弟）が、西光寺の第十七世住職となつた。

光雄は、父・赤尾白嶺（光山）と母・かめの長男として明治四十二年に出生。ちなみに父の白嶺は「花まつりの歌」の作詞者としても知られるが、明治四十三年に結核で早世している。光雄は、旧制芝中学校、大正大学と進んだが、中国語に堪能で、これが泰淳にも影響を与えた。芸術に才があり、書家、柳田泰麓・泰雲に師事し書をよくしたという。大森祥子と結婚後、那賀子、敬子、るり子の三

女を得たが、昭和十九年十一月二十六日、中国河北省あたりで戦病死した。それより一カ月前の十月二十七日、妻・祥子も、産後の肥立ちが悪く、疎開先の東京西多摩郡増戸村の大悲願寺で、三十一歳で病死（腎盂炎）した。

こうして一挙に息子夫婦を亡くしたかめは、遺された孫を抱えながら、住職の空白となつた西光寺で懸命に生きていたのである。

一方、武田泰淳は、昭和十九年六月、上海に渡り、中日文化協会に就職。その出版機関である東方編訳館において、日本語著書の中国語訳に従事していた。そのまま敗戦を上海で迎え、昭和二十一年四月、引揚げ船で帰国した。すでに、旧制浦和高等学校三年の頃から東京帝国大学入学直後にかけての左翼運動への参加と挫折の過程のなかで、浄土宗僧侶の資格を取っていた泰淳に、周囲が期待するのは当然であろう。帰国後の泰淳は、かめに懇願されて西光寺の住職を勤めるようになったのである。ただし、本堂は戦火で全焼し、かめらは敷地内にバラックを建てて仮住まいにしている状態だったので、泰淳自身は、父・大島泰信が住職を勤める中目黒の長泉院に住み、そこから時々手伝いに通うかたちだった。『僧籍簿』の記録によれば、昭和二十一年四月五日から昭和二十七年七月五日まで、泰淳が西光寺の住職を勤めていたことになっている。

しかし、かめが西光寺の復興を必死で考えていた頃、泰淳にとつても戦後派作家として確立していく非常に重要な時期に重なつてた。

すでに昭和十八年にデビュー作『司馬遷』を著していたが、文壇への本格的登場は、昭和二十二年の『審判』『秘密』『蝮のすゑ』、

翌年の『愛』のかたち』などをもってとされる。昭和二十二年には、泰淳、三十五歳であり、決して早すぎる登場ではない。加えて、昭和二十二年十月に北海道大学法文学部助教として赴任するが、翌年五月には辞職。できるかぎりの時間や精神的エネルギーを執筆生活に費やしたいという思いが積もっていったのである。

さらにもうひとつ、切実な問題があった。後に結婚することになる鈴木百合子と、神田で半同棲生活を始めていたことである。泰淳は、僧侶であることと、妻帯の問題を均衡することが、自身のなかでどうしてもできなかった。

結局、僧侶と作家の両立が不可能であることを綴った詫び状を叔母かめに渡し、そのまま寺を飛び出してしまふ。これが昭和二十四年頃のことである。

本稿で取り上げた「樹液」は、寺を飛び出す直前の頃の、泰淳の決して軽くない当時の心境がおしはかられる作品である。

戦後の虚脱感と出口の見えない恋愛からくる疲労感にとらわれながら、透徹したまなざしで、生への執着とエゴイズムについて見つけている。

本能のまま生殖行為にいそしむ鼠たち⁽³⁾。幼女たちを守るために黙々と苦しいその日その日を送っている老婆。ちぎられた蔓の切れ口から静かに滲みでる藤の樹液。「私」は、それらすべての存在に、生命を維持しようとするたくましい生物的本能とエネルギー、そしてエゴイズムをみとめる。まだ戦火の傷跡がはつきりと残っているだけに、それはよりいっそう強く感じられる。

一方、老婆の一家のちからになってやることもできず、女を愛し

きれぬ自信もない「私」は、自分の内面のどこかにも利己心が潜んでいることを自覚しながら、あまりにもあやふやな自分をもてあましている。それゆえ、あくまでも淡々と生をいとなみつづける藤蔓の樹液に鮮烈な印象をおぼえ、ひとつのたしかさを感じ入るのである。

注

(1) 昭和七年十月創刊—昭和三十年九月終刊。編集発行人、木村捨録。発行所、日本短歌社。本誌は中野重治が『齊藤茂吉ノオト』(昭和十五年七月—翌年十一月)を連載したことで知られる。

(2) 以下の拙稿をあわせて参照されたい。

・「僧侶武田泰淳の軌跡——「僧籍簿」の研究を通して——」

(平成四年三月 二松学舎大学大学院紀要「二松」第六集)

・「武田泰淳の軌跡——中央郵便局事件とその揺曳——」

(平成五年三月 二松学舎大学大学院紀要「二松」第七集)

・「武田泰淳論——社会主義と仏教と愛欲のはざまにて——」

(平成五年三月 二松学舎大学「人文論叢」第五十輯)

・「発見された『幻の手紙』武田泰淳の詫び状」

(平成六年八月 月刊「宝石」第二十二卷第八号 光文社)

(3) 人間、とりわけ僧侶の性と情欲の複雑さや不可解さを描いた短編小説「橋を築く」(小説公園「昭和二十六年六月」)の末尾では、鼠の本能の罪のない単純さを次のように述べている。

而も人間といふ奴は、橋なしですまされぬから厄介であります。鼠なら、橋の下の泥中に在つて、僧も俗もない、天然の戯れに、雌雄相ひ重なつて時の移るのを忘れるでせうが。

〔付記〕

本稿をなすにあたり、西光寺の古宇田亮順氏、古宇田敬子氏からは、多くの御教示を賜わった。ここに深く感謝申し上げます。